
あの日は

バルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日君は

【Nコード】

N6803T

【作者名】

バル

【あらすじ】

派手な喧嘩をしたわけではないのに、ある時から急に距離を取らだした二人の話を、唐突に書いてみたくて勢いで書いてみました。

僕と遼ちゃんりょうは幼稚園の頃からの付き合いで：遼ちゃんは昔からちよつと乱暴な男の子だった。例えば駆けっこでこけて、普段なら負けないような相手に負けた時：ついそいつを殴っちゃう。先生の目の前でも平気でそんな事をするから次第に皆から「乱暴」だという目線で見られる。それでも、遼ちゃんはちつともへこたれなくて、同じような事を何度もするから：陵ちゃんのお母さんはしょっちゅう学校へ来て謝っていた。

怒られた次の日は決まって遼ちゃんのホッペには痣があつた。だれもどうしたか聞かない。聞かなくても解るから。遼ちゃんのお父さんはお酒を飲むとすぐ手を上げるし大声で怒鳴る、とっても怖い人だ。子供ながらにどうして遼ちゃんのお母さんはあんな人と結婚したんだろうと不思議でしかなかった。

ある日同じように殴られて機嫌の悪い陵ちゃんに僕は聞いた。

「なんで遼ちゃんのお母さんは、遼ちゃんのお父さんと離婚しないのかな？」

遼ちゃんは知らねくと横を向いた。逸らされたその瞳はとても怒っていた。僕はどうして遼ちゃんがそんなに怒るのか解らなかった。だって、いつもお父さんの悪口ばかり言ってるのに：その日に限って一度も悪口を言わなかった。

3月11日、遼ちゃんの親は離婚した。皆よかったねと遼ちゃんに言うけれど：遼ちゃんは誰とも口をきかずずっと黙っていた。僕は

この頃から陵ちゃんが段々と僕から離れて行くのが解った。

中学に入って、遼ちゃんは先輩のいわゆる不良グループに入った。いつも威張ってばかりいる小学生の頃からの悪ガキだったグループだ。今はもう、遼ちゃんなんて呼んだらきつと殴られるんだろうと思うような目つきで人を威嚇する。ギラギラと他人を腕力のみで判断する肉食獣みたいな目になっていった。

先生からも恐れられる遼ちゃん達のグループは、悪い事を沢山した。なんだってそんな怒られる事をワザとするのか…僕には全然解らなかった。

遼ちゃんと僕が中学を卒業した春、遼ちゃんがやくざに入ったと噂が流れた。皆さして驚かず…ああやっぱりと言ったくらいだ。

僕は…小さい頃一緒に遊んだ遼ちゃんを懐かしく思う。僕がいじめられると真っ赤な顔して、いじめた相手を懲らしめてくれた…僕には優しかった遼ちゃん。

やくざの世界がどんなだか…僕には解らない。でも…遼ちゃんが辛い思いをしなければいいと…僕は願わないでいられない。僕達は幼い頃とっても仲が良かったから。

大人になって離れてしまったけれど、僕の中の遼ちゃんはちっとも色あせない。いつもの喧嘩早い、がさつで、乱暴な…あの日のままの姿で夢にでてくるんだ。

僕は高校を卒業して、東京の大学へ入学した。東京へできて人混みの中をあるくと…溜息がでる。視界に山が入らない。虫の音が聞こえない。シンと暗い闇がこない。ざわざわと雑音ばかりのこの都

会で僕は孤独を感じる。

何のためにここにいるのか…こんなに沢山人がいるけれど僕を必要と心の底から思う人に巡りあえるのか。

都会の片隅の小さな部屋で僕は何も見えない夜空を見ていた。

遼ちゃんと夜遅くまで遊んだ夏の夜、空を見上げると無数の星がきらめき…薄いレースのような天の川が山に囲まれた小さな空に浮かんでいた。雲がなくて…吸いこまれそうな綺麗な空間が頭上にあっ

た。
僕達は無言で首が痛くなるまで見上げていた。何もない田舎だったけれど…本当は僕が欲しいものはそこにしか無かった。

帰りたい…。

あの日に。

僕の胸はキリキリと痛んだ。帰ったって、もう遼ちゃんはいない。今はどこでどう暮らしているか知らない。なんだって僕は…遼ちゃんを離してしまっただろう。

居なくなるって事がこんなに苦しいなんて…君がこんなに好きだったなんて…なんで未だにこんなに胸が痛むほど君を求めるのか。忘れられない。君の代わりなんていない。たった一人だったんだ…。神様がせっかく傍に引き合わせてくれたのに…僕はそのありがたみがわからなかった。

馬鹿だ。こんなにずっと想う人を…

僕は、遼ちゃんに話しかけて無視されるのが怖かった。死ぬほど怖

かった。だから：遼ちゃんが離れていくのを知りながら：見て見ぬふりをしたんだ。意気地なくて本当に馬鹿だ。

高校はワザと遠くの私立へ行った。僕の地元からはだれもその学校には来ないのを知っていたから。

高校2年の冬、帰宅部だった僕は参考書片手に夕方の電車に乗った：座席は帰宅中のサラリーマンと学生でうまっっていて、僕は連結部分の壁にもたれて流れる景色をぼんやりみていた。一時間半程乗った頃、外はとつくに暮れて、窓は真っ暗になった。その窓に見知った顔が移った。

遼ちゃんだった。

背が凄く高くなって、金髪で：派手な衣装に派手なネックレスをしていた。

僕は電流が走ったみたいに急に緊張して：窓越しの遼ちゃんをじっと見つめた。遼ちゃんも静かに僕の後ろに立って、僕をじっと見つめていた。

相変わらずギラギラした瞳をしていたけれど：なんだか迷っているような眼差しだった。

僕と遼ちゃんは無言で窓越しに見つめあったまま電車に揺られ：その時間は永遠とも一瞬とも解らないくらい僕達はお互いに緊張していた。

ガタンと、電車が大きくゆれて：僕は、ちょっとよろけ、咄嗟に僕の左腕を遼ちゃんが掴んで助けてくれた。僕は：ありがとうと小さく言って遼ちゃんを見上げはっとした。

遼ちゃんの顔がまじかにあって：僕の大好きだったあの優しい香りがぷんと鼻についた。

その時気付いたんだ。僕は遼ちゃんの事がずっと好きだったって事を。

いや、本当はずっと知っていた。だってずっとずっと遼ちゃんを見て来たのだから。幼い頃の様にくっついて語り合う事はなくとも、いつも君の姿を探していた。君が遠くの方で笑う声を聞いて：それだけで僕は幸せだった。ただ君と同じ空間にあれば良かった。思いがけず、遼ちゃんと出会って：遼ちゃんが僕に触れた左腕が熱い。遼ちゃんの浅黒くて長い指が僕の腕に絡まっているのを見て、顔が燃えるように赤くなった。心臓の音が聞こえてしまったらどうしようと僕は俯いた。

遼ちゃんは僕の腕を掴んだまま、低い声で

「かわんねえな：お前」とぼそりとつぶやいた。

「遼ちゃんだって：変わらないよ」と僕が言うと、遼ちゃんの一重の切れ長の目がびっくりしたみたいに大きく見開かれた。僕がつい遼ちゃんと呼んでしまったことに驚いたのか？、それとも皆が口をそろえて遼ちゃんがヤクザになっただの、もう昔とは違うだの言われなれていて：変わらないと言った僕の言葉に驚いたのだろうか。どんなにかつい服を着て、どんなに前とは違う恰好をしているも：やっぱり僕の中の遼ちゃんはいつもの僕にだけは優しい遼ちゃんではない。

大きく見開かれた目が、ふっと緩んで、遼ちゃんは穏やかな顔をし

た。

こうやって向かい合うのは何年ぶりだろう。昔はあんなにずっと一緒にいたのに。子犬みたいにじゃれあって、傍らにるのが当然だと思ってたあの頃からずいぶん僕達は離れていた。

今、こうやって傍に戻るとやっぱりなんとも言えない懐かしい空気が僕達を優しく包む。

「圭、俺…」

遼ちゃんが僕の名前をよんで何か言いかけて、躊躇って躊躇って…口をつぐんだ。

僕の腕から遼ちゃんの熱が離れていく。遼ちゃんはくしゃっと笑ってそのまま無言で僕から離れ…次の駅で降りてしまった。

それが遼ちゃんをみた最後の日だった。あの日以来、僕は遼ちゃんを見かける事はなかった。小さな町で君の気配を探すのは簡単なようで難しかった。風の噂で、遼ちゃんが東京へ行ったと聞いた。僕は志望大学を東京方面へ絞って…必死で勉強した。東京へ行ったからって…遼ちゃんに会えるとは限らないのに。それでも少しでも遼ちゃんの近くへ行きたかった。

東京へ来て一年がたった。盆も正月も地元へは帰らなかった。帰ったって遼ちゃんがない事を僕は知っていたから。それに、もし万が一君の情報を手に入れてしまったら…僕はもう気持ちを押えていられない。早く色あせて鎮静化してしまえば良いと願いながら…ずっと僕の心の底で燻ぶる君への想い。いつまで僕の心を焦がし続けるんだろう。

電話がなった。地元の親からだった。

「圭、遼ちゃんのお母さんが亡くなったの。お前、遼ちゃんどこに居るか知らない？明日つやなんだけど…お前帰ってくる？」

「え…お婆さんが？そう…明日帰るよ。遼ちゃん何処にいるか知らない…」

僕は携帯を切った。

優しいお婆さんだった。僕の母より若くて…僕と遼ちゃんが遊ぶのをいつもニコニコして見ていた。どうしよう…遼ちゃんの大事な人が死んでしまった。遼ちゃんはどこでこの事実を知るんだろう…

小さな遼ちゃんが…膝を抱えて暗闇の中でひっそりと座っているような、なんとも言えない寂しい気持ちになった。遼ちゃんはきつと泣かない。ただひっそりとげんじつを受け入れてどんどん孤独になって行くんだ。周りに沢山人がいたって、いつだって遼ちゃんは寂しそうな顔してた。

あの日だって…

最後にあったあの日、君は僕に何を言いたかったんだろう。僕は言いたい事沢山ありすぎて君に何も言えなかった。もう一度…遼ちゃんに会いたい。

僕は急いで鞆に荷物を詰め込み新幹線の終電に間に合うか確認して、部屋を飛び出した。プラットホームでは帰宅を急ぐサラリーマンや学生。電車にとびのって、東京駅を目指す。

地下を電車が通るなんて、田舎にいた僕は最初びっくりしたつけ。地上でしか生活した事のない者にとって地下鉄はとても息が詰まる乗り物だ。轟々と音を立てながら暗闇を走る電車の行先は本当に東京駅なんだろうかこんな日は不安になる。早く地上に出たい。嫌な機械音と車輪がすれる音：そこに自然の音は無く耳がおかしくなりそうだ。早く帰って早くあの静寂な夜を迎えたい。人の死を悼むならそんな夜が欲しい。無機質で淡白なこんな都会の夜ではなく優しいぬくもりに溢れた土地の香りの中で遼ちゃんの大事な人の冥福を祈りたい。

東京駅について、新幹線に乗り込む。座席は意外にも混んでいた。

僕は連結部分の壁にもたれて：あの日君にあったみたい、何も見えない真っ暗な窓をみつめていた。

ガチャツと音がして自動ドアが開く。キュウつと靴がすれる音が止まった。真っ暗な窓に浮かび上がったのはくたびれた顔をした遼ちゃんだった。

僕は咄嗟に後ろを振り返った。遼ちゃんは切れ長の目を見開いたまま固まっている。窓越しじゃなく僕達はほんの少しの空間だけを開けて互いの顔を確かめるみたいに見つめあった。遼ちゃんは少し痩せただろうか：もともと太ってはいないが筋肉がしっかりしている。Lサイズの服も窮屈そうだった。白いワイシャツと真っ黒なズボン：手には上着をもって、ああ：遼ちゃんはこれから帰るんだと解った。

ガタガタと不安定な高速の乗り物の上で僕らはまた巡り合った。今日はあの日の続きなんだろうかと、こんな夢みたいな事が現実にお

きるんだろうかと…僕達は二人とも呆然としていた。

「遼ちゃん…帰ろうか…」

僕はずっと言いたかった言葉をぽろりと口にした。そうだ…僕はずっと遼ちゃんと帰りたいかった。あの日の僕達に。自然と心の底からぽろりと出た本音。

遼ちゃんはずっと近寄ってきて、僕を抱きしめた。

「圭…逢いたかった」

「遼ちゃん…僕もだよ。ずっとずっと…逢いたかった」

遼ちゃんを抱きしめ返す腕に力がこもる。ああ…僕達はやっと戻ってきた。また二人であの日の続きを歩んでいくんだ。何も怖くない。いつだって君だけがいれば良かったんだ。

轟音に包まれた高速の乗り物は…僕達を乗せたまま無機質に進んでいく。でも前よりずっと温かい。寂しさや虚しさが消された瞬間…孤独に震えた心も碎けた。温かい体温を感じながら僕達は高速である日へと帰っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803t/>

あの日君は

2011年10月8日19時29分発行